別府近現代新聞史をひもとく

外山健一

一　我が国の新聞の草創

新聞とは「社会の出来事について、事実や解説を広く世に伝える定期刊行物」であるとの定義があるが、この稿では国内、県内の新聞界の発展を背景に、大正期以降活発となった別府の新聞事情を探ってみたいと思う。

近代日本の黎明は、徳川第一五代将軍徳川慶喜の「大政奉還」（慶応三年十月十四日）に端を発し、所謂ご一新の世へと歩みを進めたが、「散切り頭を叩いて見れば文明開化の音がする」と、国民は急速に西洋化を進める時の政府を揶揄した。

この時期、文化の普及に大きな役割を果たしたのは、教育と報道事業（ジャーナリズム）であった。このうち新聞は、幕末、横浜・長崎などの開港場で発刊されることはあったが、手書きの回覧文書で月刊ないしは五日刊、内容も外国新聞の翻訳記事が主であった。

明治二年（一八六九）二月に布告された「新聞印行条例」によって、翌三年十二月に「横浜毎日新聞」が発刊されたが、これが近代的な体裁を整えた最初の日刊新聞であった。鉛活字を用い、当時としては高価な西洋紙の一枚刷りであった。その後活字印刷技術の進歩にともない、新聞・雑誌などの刊行も盛んになるが、明治初年に発刊された新聞には、「東京日々新聞」（明治五年）、「郵便報知新聞」・「朝野新聞」（読売新聞）・「平仮名新聞」（以上同七年）などがある。

当時は購読者が主として少数の知識層に止まったからか、発刊が永続するものは少なかった。

二　大分県下草創期の新聞

ご一新以後の文明開化の進行や自由民権運動の進展などを背景に、言論活動が活発になると、県下にも新聞社が誕生するようになった。県下初の新聞は、明治六年（一八七三）十月二十六日、大分郡大分町で創刊された「大分一周新聞」である。その名の示すとおりの週刊紙で、一ページ一六字詰め一二行の小半紙一〇枚程度を綴ったものであった。

発行者（社主兼著名人）は、印刷屋村上堂の村上勘兵衛、編集担当者は、和洋紙商を営んでいた三塚乙人、専ら記事を

書いたのは児玉九春・高取成章・秋月毅らであった。

明治九年（一八七六）十一月十三日、中津町で「田舎新聞」が創刊された。創刊にあたっては、中津町の村上田長が主唱者となって中村松太郎・是恒真揖・山口半七らの同志を募り、一株五円で一九〇株、九五〇円を資本金として発足した。西南戦争中津隊の首領増田宗太郎が一時編集長に就任している。

この「田舎新聞」に刺激されて、同十二年十一月五日に大分町で創刊されたのが「南豊新聞」である。さらに同十六年十二月には、県令（県知事）西村亮吉の御用機関紙として「大分新聞」が誕生している。

三　大正デモクラシーと別府の新聞

別府における新聞の誕生は、第一次世界大戦のもたらした大戦景気を背景に、湯の町別府が急速な発展を遂げる大正時代になってからである。時あたかも民主的な風潮の高まった大正デモクラシーの時代に当たり、ジャーナリストや弁護士などが民主化推進のリーダーの役割を担った。

このような風潮の中、大正元年十二月一日、別府町浜脇で入湯旅館「河綱」を経営していた佐藤綱五郎（後第五代別府町長）が「別府新聞」を創刊した。これが別府町最初の新聞である。佐藤綱五郎は浜脇河内で生まれ、明治三十一年（一八九八）二月一日、若干三十三歳にして旅館「河綱」を開業した。屋号は、出生地「河内」の地名と名前「綱五郎」から各一字を採り名付けたと言う。

（名　称）	（社主氏名）	（創刊年月）
別府新聞	佐藤綱五郎	大正元年十二月一日
温泉タイムス	伊藤徳兵衛	大正五年八月
大別府新聞	山田騎風	大正八年三月
別府新報	山西保	大正八年五月
毎夕新聞	南波保	大正十三年三月

彼は後、別府宿屋組合の会長職に就任するや、別府温泉宣伝の一策として「別府新聞」を創刊したのであるが発刊は月三回であった。

これに次いで大正五年（一九一六）八月には、弥生町の伊藤徳兵衛が「温泉タイムス」を、同八年三月には旭通り三丁目の山田騎風が「大別府新聞」を、また同年五月には翁町の山西保が「別府新報」を相次いで創刊するなど、大正時代初期の別府の町はここに至ってまさに活字文化の花が一斉に開花した観を呈した。

この背景には、大戦景気に加え、日豊線大分までの開通

（明治四十四年）や大阪商船別府～阪神航路の整備―「くれない丸」（一三九八トン・ドイツ汽船会社より購入）に加え、大正十年十二月、海の女王と呼ばれた「むらさき丸」（一五九七トン）も就航―などにより入湯観光客が急増して別府町が泉都として急速な発展を始めたことがあった。

第一次世界大戦の終結した同七年（一九一八）二月十四日には、帝国海軍連合艦隊第二艦隊の主力艦比叡・金剛・霧島・などが別府湾に投錨、同五月にはオーストラリア軍艦「カイゼリン号」も寄港、大正末の十五年二月には、カナダ太平洋汽船「エンプレス・オブ・スコットランド号」（三万五〇〇〇トン）が四五〇人の観光客を乗せて、また十月にはスエーデン皇太子夫妻や英国軍艦八隻が来訪するなどのことは、別府が単に国内のみでなく国際的にも観光都市として注目され始めたことを物語っている。

このほか修学旅行生やお伽倶楽部の子供たちが地獄観光などに訪れ始めたのもこの頃からで、新聞はじめジャーナリズムの側から見れば、別府は格好のニュースソース提供の場であった。

大正十三年（一九二四）四月一日、別府町は市制を施行し別府市が誕生する。

四　今日新聞の創刊と地域紙への歩み

昭和三年十月、北町の岩屋護（衆議院議員岩屋毅氏の祖父）が「今日新聞」を創刊した。この新聞は、政談を主に取り上げ辛口で論評しているのが特徴であったが、昭和十二年（一九三七）の日中戦争の始まりとともに軍需優先の経済統制策により、昭和十四年の新聞統制令で廃刊となった。同十六年十二月八日、太平洋戦争が勃発すると言論統制も厳重を極め新聞はその機能を果たせなくなるが、他方物資の節約を理由に一県一新聞の制度が強要され、県下でも「大分新聞」と「豊州新報」が統合され「大分合同新聞」が誕生する。

昭和二十年八月十五日太平洋戦争が終戦を迎え、新生日本が民主化の歩みを始めた。しかし食料をはじめ諸物資の不足から別府市民も生活難に追われ、新聞地域紙の復活などは論外のことであった。

昭和二十九年十一月二十五日、戦前岩屋護が立ち上げた「今日新聞」の「題字」を受け継ぐかたちで、檀上栄がタブロット版四ページの小型紙として現「今日新聞」を創刊した。時に檀上栄二八歳の晩秋のことであった。

発足当時のスタッフは、社長檀上栄ほか檀上修、檀上裕、

（名　称）	（社主氏名）	（創刊年月）
今日新聞	岩屋　護	昭和三年十月
別府日日新聞	市原清太郎	昭和六年九月
毎日新聞	渡部　基	昭和六年十月
大分ポケット新聞	泉　鶴吉	昭和七年二月
國粋新聞	不　明	昭和十一年一月
東九州新聞	不　明	昭和十一年一月

安部秀之助の四名であった。

「今日新聞」題字並びに社是の「愛郷一貫」は、書家首藤春草の揮毫になる。

創刊第一号は、羽衣町、今の千代町にあった印刷会社光進堂で印刷された。当初の一カ月は二〇〇〇部を印刷、これをアルバイトの小学校高学年生徒五〇名の手により、各戸に無料配布し、翌月の十二月からは購読料月額一〇〇円の有価紙として購読者を募った。結果は契約金一万四〇〇〇円、これを手にした檀上栄は「これならばやって行ける」と確信し、それを神棚に供えて思わず伏し拝んだと述懐している。なおこの頃市内では「観光ぷれす」・「東九州新聞」・「別府夕刊」などの諸紙も発刊されており、別府のジャーナルもしだいに賑やかさを増しつつあった。

（名　称）	（社主氏名）	（創刊年月）
商業タイムス	山陰智軌	昭和二十二年四月二十八日
観光ぷれす	山陰智軌	昭和二十二年五月
東九州	有田耕也	昭和二十二年十二月
夕刊新別府	加藤　久	昭和二十五年二月
泉都べっぷ	渋谷銀蔵	昭和二十六年八月
今日新聞	檀上　栄	昭和二十九年十一月二十五日
別府夕刊	京泉満夫	不　明
九州新報	坂井富生	昭和四十六年九月一日 昭和五十年六月一日
夕刊大分	舌間一男	昭和五十一年三月二十八日廃刊
亀川ニュース	塩手基治	不　明
北別府ニュース	塩手基治	昭和五十九年

昭和三十年八月一日、今日新聞社は、野口元町の現在地に事務所と工場を竣工させ、十月一日からは念願の自社印刷へとスタートした。翌三十一年九月には社屋を増築、写真製版室を設置し、最新式製版機エッチングマシンを導入、さらに三十二年二月には、写真製版機タブソン式自動印刷機をも入れて、読む新聞から見る新聞への脱皮を目指し写真製版に力を注いだ。昭和三十五年には新たに印刷部を設立、「別府市

報」、「競輪出走表」などの印刷をも受注するようにもなった。

昭和四十二年十月、今日新聞社は技術革新の時期を迎えた。活字を全廃して写真植字による社独自のCTS（コールドタイプシステム）方式を採用した。

鉛の活字を一本一本拾って版組みする新聞作りから、写真植字、電算写植、さらにはデジタル写真などの導入と努力が重ねられているが、全国的な技術革新の成果の吸収なくしては、読者のニーズにかなう新聞作りはできず、目まぐるしく進展する社会情勢にも対応できないからであった。

同業の「観光ぷれす」・「東九州新聞」・「別府夕刊」はすでに廃刊になり、観光温泉文化都市を標榜する別府市にとっては寂しい限りであるが、後継新聞の登場が待たれるところである。

県下唯一の地方紙「今日新聞」は、今後とも、「中立公平の旗印のもと、金権を排し社会正義を確立し、住みよい地域作りに精進する」という目的を掲げて「愛郷一貫」の紙面作りに遭進すると決意のほどを披瀝しているが、これからは地方の時代、地方文化振興の観点からも、「今日新聞」のますますの発展を願うものである。